図書紹介（70）

『天理教教義学研究―生の根源的意味の探究』澤井義次、天理教道友社、2011年

おやさと研究所教授
堀内　みどり　Midori Horiuchi

本書は、澤井義次氏（天理大学人間学部宗教学科教授、おやさと研究所兼任研究員）が長年にわたって関心を持ち続け、1996年4月から『みちのとも』誌上で12回にわたって連載された「天理教教義学研究」を中心に、『天理教学研究』（5篇）および『逸話篇に学ぶ生き方2』（1篇）を加筆修正し編纂されたものである。その目的は本書のために書き下ろされた「はじめに」の中で、次のように述べられている。

「私たちが生きていることには、限りなく深い意味がある。その限りなく深い意味を、天理教教義学の視座から捉えなおし、生の根源的な意味を可能な限り明らかにする。それが小著の目的である。」

著者は、天理教教義学の責務を「天理教の教義と信仰に照らして、混迷する現代社会へ向けて、生きていることの真の意味を発信していく」こととし、本書もその一つであるとの思いで編纂されている。本書の構成については著者自身が以下のように概観している。

第1部「天理教教義学とその視座」では、現代社会において、生の根源への問いが私たち現代人にとって、いかに本質的で重要であるかを明らかにし、そのうえで、現代社会の諸問題に対処するために、天理教教義学の視座を提供し、人間存在の生の意味を捉える根本的なものの見方を考察したい。

第2部「親神とその守護」においては、根源的啓示と生の根源的事実性の関わりを論じることによって、天理教コスモロジー（人間観･世界観）の構造を明らかにする。また、親神の呼称（「神」「月日」「をや」）の説き分けに込められた意味を考察することによって、この存在自体が親神の守護の理の世界であり、人間身の内は親神からの「かりもの」であることを自覚的に理解したい。

第3部「生の根源的意味とその理解」では、私たち人間が親神の守護に包まれて「生かされて生きている」という生の根源的事実性とその意味について理解を深めたい。ここでは､「かしもの･かりもの」と「いんねん」の教理によって教示される人間存在の生の本質的なあり方を明らかにする。さらに現代人の人文諸科学の研究成果を踏まえながら、人間存在の生の事実生とその意味をめぐって、天理教人間学の意味論的パースペクティヴ（視座）を提示し、人間存在の生の根源的意味を探求したい。（「はしがき」より）

以上のように本書は天理教という教えが「生」という事実についてどのように教えているのかを天理教教義学で扱う様々な分野からのアプローチであり、その根本は「親神こそが私たちの生の根源である」（11頁）と言説によって表明されている。しかしながら、現代人はこの生の根源的事実性を見失って、上滑りをしがちであるので、人間存在の生の根源あるいは本来的なあり方を取り戻さなければならない。著者は、いわゆる「近代の知」が現代に与えた影響から説き起こし、生の本来的あり方へと進む。そうした時、私たち人間存在の生の根源あるいは本来的なあり方を考え深化させようとする人々にとって、天理教の視座を提供することは、非常に有意味であるとする。なぜなら、神と人間とのかかわりとして、人間存在を考察するとき、親神と人間とのかかわりは、まさに、この世界になぜ私たちが存在していられるのかという根本的で根源的な問いに応答しているからである。それは「生かされて生きている」という実感であり自覚として言表されるところのことであるが、これについての叙述は親神の守護についての論究と相応しながら、特に後半で詳細に述べられる。

私たちの生活世界は、既成の日常的な意味世界だけでなく、（現象学的には）生活世界の深みには、すべての個別的な日常経験の普遍的な基礎として、あらかじめ「直接与えられている世界」が現前しており、それはあらゆる意味形成の根源的な基盤としてすでに与えられている親神の世界であるとする。すなわち、私たち人間は二重の生の世界に生きる存在であり、「私たちの心の地平が生の表層から生の深層へと深まっていくにつれて、生の世界全体が次第に拓かれていく。この存在世界が無限の拡がりと深みをもつ親神の守護の世界であり、私たち人間が、親神の守護によって『生かされて生きている』という生の根源的事実性を自覚的に理解できるようになる。」（258頁）と述べる。それは、教理の理解が生の意味理解の深化と対応していることを示すものである。天理教の信者にとっても、また天理教を知りたいと思う人にとっても、天理教教理理解に寄与する非常に丁寧な解説になっている。

このような「生」についての著者の天理教学における探求は、この『グローカル天理』での連載にも現れている。連載は2007年に『天理教人間学の地平』（「グローカル新書」8）としてまとめられた。ここで｢天理教人間学｣として扱われたのも、まさに、私たちが生きているという「生の事実」を天理教学の視点で掘り下げていったものである。｢意味論的パースペクティヴとはなにか」から始まり、近代科学の知の地平を超えて「天理教人間学の地平とその特質」から「生」を考察する試みは「生の根源的意味の地平へ」と向かっている。

是非お読みいただきたいと思う。